

広報

つる

都留文科大学創立30周年

記念講演 特集号



# 「社会変化と教育」

講師 元文部大臣

永井道雄先生

## 永井道雄先生の略歴

国際文化会館理事長。国連大学学長特別顧問。元文部大臣。京大卒後、米オハイオ州立大大学院で学ぶ。教育社会学専攻。京大助教授。東京工大教授。朝日新聞論説委員など歴任。1929年生れ。

### 上田君と私の仲

今、上田さんのご紹介がありません。何か違う人のことを呼んでいるような気がする間柄です。二人は旧制の武蔵高校を出て、当時の京都大学文学部哲学科に入りました。いろいろ偉い先生もおいでになって、とりわけ上田君のおじいさんに当たる西田幾多郎先生は大先生なんです。既にご定年で家においでになったから、そしてそこに上田君がおられるものですから拝

顔の榮に浴することもできませんでした。|といても余りしゃれた格好をして、時々シャツとモモヒキで出てきたりする。人というのはそういうものだと思いが、そういう方でした。しかし、その先生は教えているから、先生の弟子筋に当たる、これも一人一人名前を挙げれば、日本の思想史に残るような有名な先生方に習ったわけですね。しかし、そういうことも全部忘れてしまっ、ここで私が思っていることを言えといえ、京都の学校のあたりの道路を、上田君と私といつも一緒に二人で歩いたことです。それを何より思い出します。お互いに若いですから、日本の将来も世界の将来もわからなかつた。もちろん総理大臣の東条さん、もっとわからなかつたかもしれない。それほど劣等感を持つ必要はないんですが、しかしながら、わかりませんでした。

よく頑張った。冬將軍という言葉があります。真冬になるとソ連の連中は強いわけですね。さすがのヒットラーも夏や春は元気ですが、雪が降り出すとまいるわけですね。そういう情報があつて、上田君と二人で歩いて、さて、これからどうなるだろうというようなことを、本当に真剣に話しました。そして、そういう中で日本がどうなっていくか、これも真剣に話しました。何といつても半世紀にわたる上田君とのつき合いですから、もっと丁寧に話をしろといえ、きょうの三十周年記念会はあしたの昼ごろまで続けていただくように方向の転換をやらなかつた話です。繰り返しますが、二人で道路を、一生懸命な気持ちを持ちながら歩いたことです。これは、学生あるいは友人の最大の特権だと思つています。こういう最大の特権といふのは、大臣になろうと、あるいは外国の大学の教授になろうとなかなか与えられません。それを二人で享受したぜいたくと、そしてそのとき上田君から受けた刺激、それは今も忘れません。どうか学生諸君、都留のまを親しい友と歩いてください。そして話をしてください。そして恐らく五

十年後に、変なヤツが、おれは学生時代にこういう友人とこんなふうと一緒に歩いたんだということを五十年後の若い人に伝えてください。ほかにたくさん思い出がありますが、それだけにいたします。締めくくりますと、私に数人、日本人と外国人の親友がいます。

余りたくさんいないんです。その親友の中で最も尊敬しているのは、上田薫君です。どうして尊敬しているかと言えば、人間が偉いからです。つまり彼は教育学を研究したから、その本は立派なことが書いてあって—日本の教育学者には随分怪しいのが多いんですが、怪しくないです。(笑声)そして、時流に乗らないです。そして華やかでないんです。そしてある人が右に曲がろうかというとき左の方を向くくせがあるようです。(笑声)左に向くというとき右を見るくせがあるようです。そういう友人に私は助けられました。ですから、きょうは都留文科大のお祝いを言う日だということはちゃんと覚えていますが、しかし、それに先立って上田君に対する謝意を述べます。謝意というのはちょっとよそよそしい感じがありますが、同時に彼が頑張ってきた、皆さんと一緒につくったこの都留文科大が

本当に立派に発展して、そしてきょうのような日があることを喜びます。これは喜ぶというのは、私の考えでは感謝以上のものです。さて、本題に戻りませんと、身の上話で終わりますから、本題に戻ります。

### 市と大学は運命共同体

きょう、先ほどの話をずうっと聞いていました。都留文科大というのはなかなかいい大学なんだなと思いました。どうしていいんだろうか考えておりました。初代の学長諸橋轍次というのが破格のリーダーで、諸橋轍次先生のことは皆さんご承知でしょうが、百歳まで字引をつくっていたという信じられない人間です。偉い大学教授ですが、その前に中学で教えていました。中学生に字を説明するのは大学生に説明するよりもうちょっと難しいんでしょうが、しかし、それをやったおかげで先生の字引は書いてあることがわかりやすいです。きっと先生が大学で教えた学生も非常によくわかっただろうと思います。その先生が初代だということを知っていて、なるほどなと思いました。それから和歌森太郎という先生、でも、お勤め

は短かったと思いますが、ご病気でお亡くなりになった。上田君の前は大田堯先生等々、非常に東京でも得がたい方々がどういわけか、何かの魅力があつてこの都留に集まるということ、きょうひしひしと感じます。都留が大きなまちだったら、多分この学校はこんなによくならなかったと思います。しかし小さい町です。そこで市長さん初め市役所の方も、何か全力投球をしたような気がします。そして、市と学校と区別なくある種の集団ができて運命とともにするという、この集団の友情とか愛情とか、そういうものがこの辺に、今朝、あるような気がしました。

今、日本ではご承知のように、世界でもそうですが、規模で勝負ということがございますから。例えば新宿に行くと、あそここのビルはたった四十階だそうだと、こっちは五十階だというと、隣のビルが、ああ、たった五十階か、おれのところは六十階だと、そういう時代であります。都留文科大はまさにその反対の方向を向いて歩いているような気がします。規模でなく質で来いと。そして、そこに立派な先生方がおられる。また、立派な学生諸君がおられるという

ことは大事でありまして、学生諸君は学校を担う主役の一人です。この人たちがだめだったら、いくら教師がばたばたしてもしょうがないんですけれども、けさから顔つきを見ていると、相当人相のいいのがたくさんいるように思いました。(笑声)そして、その小さな集団を後ろの森、そして山野が助けてくれているように思います。それが東京から参りました私の感想です。そして三十年がたったと。

本当にその結果、そういう同志の村がここにできたわけでございますから、これを大事になさって、日本で大学をもつ町の規模という話になったときに、困ったら都留文科大に来て。今もそう思っている人がいるんでしょうが、将来のために一層そうした線でご発展があることをお祈りします。市長さん、市議会の方、どうかこの可愛らしい赤ちゃん、この大学を育ててください。

### エコノミック・ジャイアンツの責任

さて、そこまではお祝いで、その次はいよいよ本題でございます。何の話をするかというふうに学校からご連絡ございましたので、社

会変化の中の大学という話を、教育という形を申し上げますというふうに言いました。そこで私は以下の話、いろいろ考えまして、四つのポイントについて申し上げます。

まず第一は、エコノミック・ジャイアンツの責任—東京ジャイアンツじゃないですよ、エコノミック・ジャイアンツ、経済的な巨人路線、これについて申し上げたいと思います。

日本が敗戦しましたのは昭和二十年、一九四五年、そのときはるくに食べ物もありませんでした。そして、どこの家も火の車の会計でございます。大学で勉強するところ、先生たちも余裕がありません。ですから、うんと節約をして、そして緊張して、なるべく頑張りましょうなんて言う必要はなかったわけです。頑張りなければ死んでしまうわけですから、よほどとぼけた人間でも、その敗戦直後の空気というものに参加していくのは、ある意味ではそう難しいことではなかったような気がします。当時の論説委員だった堀江先生(注 大月短大学長)が今うなづいていきますから、間違いないと思います。そのころの日本の目標は二つあ

り得たわけですが、一つでした。二つあり得たという意味は、明治の初めからの目標というのは案外単純でありまして、富国強兵というものです。つまり欧米諸国が相当の軍隊を持っているというのであれば、こっちも相当の軍隊を持つとうじゃないかと。そこで陸軍・海軍・空軍。実は日本の軍隊というのは案外戦闘力があつた。それは日清戦争を見ればわかるし、日露戦争を見れば非常にはつきりします。ロシア人は何といつても白人ですから、革命以前のロシアです。それから、世界じゅうに、日本がロシアに対して戦争に勝つということを予測している人はなかつたわけです。実を言うと日本人が勝つはずがないというふうに思つておりましたから、当時の錦絵を見ますと、ロシアの体の大きな兵隊さんが鉄砲を持って日本人の兵隊を刺そうとしている。日本人の兵隊がそこにいまして、やっぱりこれも鉄砲を持っている。ところが錦絵ですから、写真と違って作者の主観が入るんですね。ロシア人の方は白くて大きいんです。日本人の方は黄色くて小さいんです。ところが不思議なことに、その黄色くて小さい方が勝ちますから、だんだん錦絵の姿が変わつてロシア

人が黄色くなくていく。本当の話です。今、錦絵のコレクションを持っている人がございますから、必要があつたらご紹介します。日本の兵隊がだんだん白くなる。そういうことを二年間ぐらいやっていくうちに本当に勝つちゃつたわけです。実は一番驚いたのは日本だと思ふんです。それから先どうするかということがわからないままに榮えますと、いいこともあるでしょうが、悪いこともたくさんあります。まず一つは驕り（おごり）というものが勝つたこと。そこで、当時石川啄木という詩人が、日露戦争に勝つて自分が信じてきたこの明治国家というのはどうも終わりになるらしい。どうしてかという、日本人は突然自分が偉いと思ひ出して、今まで支那人と言つていたのに言わなくなつた。何と言ふかという、チャニコロと言ふようになった。ロシア人と云わなくなった。何というかと云うと、ロスケと言ふようになった。だから、チャニコロとロスケというようになって明治の初めの日本は滅びた。もちろん非常に直観に富んだ人ですから、詩ではございませぬ。「閉塞の時代」というエッセイを書きました。

が、学校に行つても校長先生が妙に威張るそうです。特に校長先生に対して率直に意見を言う普通の先生がいますと、ご機嫌が悪くて、校長先生が、自分の言うことを聞いて教育していれば間違いないと。そうですか。しかし、どういふふうにするんですか。そうすると自分の家に、いや、学校に教育勅語の法案書があるから、そこで読んでやるから聞いてろというので、自分の意見で考えるんでなくて、とにかくそれを聞かせて、あとはもう従順に従つておれと。啄木は別に儒教の教えを全部否定する人ではなかつたわけです。しかし、そのやり方がいかにも一方的ですから、何か校長まで変わったと。その校長の家にわざわざ訪ねていくと、当然のことながら奥さんがいます。学校であんなに威張つていた校長が、奥さんの前に出ると不思議にべこべこしている。奥さんのご機嫌をとっているわけです。世の中で威張る男は女房に頭が上がるらないという新しい事実も発見した。それが日本の衰退の始まりで、別に啄木は、だから日本も威張れと言つたのではないんです。そうではなくて、男女は対等であつて、そして、そういうところで教師と学生も、先生も校長も本當の

意味では対等である。そこで明るく話し合うという明治があつた。しかし、それが消えていく。啄木はそれを「閉塞の時代」で言ひましたが、実は昭和二十年の予測を書いたわけです。ですから、その後になりますといふいろいろ日本も困つたことがあるといふことを書いた人がたくさんおられますが、明治四十年というあたりで日本の行方を見た人はそうなかつただろうと思ひます。

が大変豊かになつたわけではありませぬ。しかしながら、後で申し上げますけれども、発展途上国への援助のお金とか、あるいは企業の中での教育費とか福祉のお金、世界的に比較をいたしますと相当のところへきました。これは、この敗戦直後の日本の基本的な方向についての目標の定め方が、まあ私は大局的に見て間違いがなかつたからだと思ひます。とにかく暮らせるようにしよう、戦争直後苦しい時代がおよそ十年続きましたが、これがガラリと変わったことになつたのは、実は朝鮮戦争の絡みです。朝鮮で戦争が起りまして、軍需物資が必要になりました。また、朝鮮をめぐつて米ソが対立するこゝとになりました。そうすると、アメリカとしては、アメリカにもつと日本が近づくことを望むようになりまして、日本ももちろん安全は欲しかつたし、経済の発展は望むところでしたから、アメリカとの結びつきを強める方向に進みました。ただ安全保障の条約を結ぶについては、戦争放棄という点から、野党をはじめ少なからぬ反対があつたのです。

だ、やっぱり人間というのは安全保障、そして平和ということを考える場合にはある程度の努力を持たなきゃだめだ。それはちょうど町から全部お巡りさんがいなくなったらどうなるのか。すべての人間が大変いい人になって絶対に相手を殺さない、絶対に盗まない。まだそういう国が一つでもできていない。そこでお巡りさんがあるんですが、最低の基準としてもそういう安全保障は必要でしょうということ、その安全保障を取り入れまして、とにかく非常な衝突がありました、どうか無事におさまった。そのときの総理大臣が池田勇人という人です。池田勇人という人は、国民に向かってある目標を示しました。所得倍増ということ、つまり自分が総理大臣になって頑張れば、生産を上げると、それから第三次産業も拡大するし、輸入・輸出も力を入れていくし、必ず自分がやっている一九六〇年代は所得倍増、倍になりますよと言ったわけです。もちろん野党は、総理大臣の頭がおかしくなった、計算能力がなくなると。当時の新聞を読みますとたくさんそういうことが書いてあります。自民党の中でも普通の代議士さん方は、うちの総理はおかし

くなると。五〇%ふえるとか四〇%ふえるというのはわかるけれども、倍増というような変なことを言うのが池田勇人だということになったわけです。この池田勇人という方は、日本でオリンピックが開かれたとき、がんが発生しましてお亡くなりになりました。しかし、非常におもしろい問題、世界の歴史にないおもしろい問題は、この一九六〇年代、つまり昭和十五年から四十五年までの十年間、日本人の懐かあいはどうなったかという、所得三倍増になったわけです。池田さんはもう死んでましたけれども、もし生きていたら、池田さんも腰を抜かしただろうと思います。どうしてそうなったかといえ、毎年実質経済成長率が十%以上で、それが十年続いた。とにかく、池田勇人という人物がやった経済政策というのは、公平に見て成功だった。しかし、ただ、池田勇人だけが頭がよかったわけではない。まず大事なのは、国民がよく働いた。ただ、ばか働きをするんではなくて、例えば自動車会社あるいは電化製品、そういうふうなものをつくっていくときにどういう知恵が必要か、どういう分業が必要か、そういうことを十分にわかって、しかも自分の能力

を発揮する、それだけの潜在力を持っておりましたから、この国民のおかげが大きいです。では、なぜ国民がそんなに賢かったかというと、これは明治の初め一八七二年ですが、そのころ日本に義務教育ができました。この義務教育、そして先生方を育成する師範教育、これに明治の政府は相当の力を入れました。また、戦後の義務教育はそれまで六年だったわけですが、九年に延ばしました。そのときの総理大臣が芦田均という京都の人ですが、そんなことをやったら、ただでさえ苦しいものがめっちゃくちゃになると。しかしながら、自分は考えた。別にアメリカから押しつけられたわけではなくて、苦しいから日本は教育に投資をする。それで芦田内閣が苦しい状況になっても結構、そういう演説を国会でいたしました。つまり命がけの教育尊重であったわけです。そこで、世界にない所得三倍増という信じられないことが起こりました。

アラブ諸国十九ヵ国、これは産油国ですが、そこが、自分のところの石油について、そうむやみやたらに使うなどアメリカ人や日本人に文句をつけてきた。使うなら二十倍ぐらい金を払えと言ってきたわけです。当時、日本はそれでつぶれる、アメリカもつぶれる、イギリスもつぶれる、そういうふうな思った人が多かったわけですが、事実、つぶれるのに近い状況に大抵の欧米諸国は追い込まれました。ところが不思議なことに、この日本が一九七〇年代、二度にわたって石油危機というものに対する不思議な対応力を発揮したわけであります。私は当時、三木武夫さんの内閣の文部大臣をいたしておりますから、今の問題について総理とお話をしたり、当時、経済政策の舵取りをしていたのは福田赳夫氏ですから、福田さんとも今の問題で、どうやって日本がこれに耐えるかということを繰り返しお話ししたことを覚えております。

省エネということが始まりまして、二つ石油危機があったにもかかわらず日本経済は活動し続けました。そうすると、まず所得三倍増だと。次に石油危機が来ても平気だ。これも別に総理大臣がやったというわけではない。つまり都留にいる家庭の普通の婦人、あるいは商売をやっているしゃる商店、学校、そういうところで、だれ言うともなく省エネになった。それが日本を救いました。そして次が八〇年代、今我々が生きているときですが、ここで日本の輸出能力は、要するに世界で最高のものになりました。

例えばアメリカと日本というものを並べますと、もうアメリカというのはお金持ちです。アメリカ人と会って食べるときは、向こうはおいしいものを食べるけれども、こっちは少しお粗末なものでいいでしょう。こういう経験は明治の初めから一九八〇年まであるわけです。ところが、そのアメリカ人が金を持っていない。それじゃ、日本人がごちそうしましよるかという状況が生まれて今日に至っているわけです。

そこで私は、これからの先生方、あるいは先生にならないまでも会社にお入りになるようなこの学校

の卒業生の方、あるいは勉強して  
いらっしゃる方、それからまたこ  
の大学の先生方、みなさんに経済  
大國の責任は何か、こういう考え  
たこともない問題を考えることが  
今の時代の要請であるということ

を申し上げたいわけです。これが  
本当に大変な話。石川啄木ではあ  
りませんが、とにかくほかの人の  
ことは知らない。日本はもうける  
というけれど、悪いことをして  
わけじゃない。よく働くんです。  
時間外勤務もやるんです。それで  
もうけるんだから、怠け者である  
ような西洋人が滅びたっしかなか  
ないでしょう。あるいは発展途上  
国にはいろんな人がいるけれども、  
そういうところには泥棒が多かっ  
たり、あるいは怠け者が多かっ  
たりするわけです。日本がもうける  
のは、これは当たり前の話。そう  
いうところで余り文句を言わない  
てくださいというのが長い間の日  
本人の考えだと思えます。事実、  
日本人が、一生懸命に働いて自動  
車をつくらうが、あるいはテレビ  
をつくらうが、そんなものが世界  
経済ではかの国を苦しめたことは  
ございませんから、そこで日本人  
が進んで世界の事情を考えながら  
金もうけのために働こう、あるい  
は世界の事情を考えながら教員と

して仕事をしよう、あるいは研究  
をしようというようなことを自然  
に考えるはずがない。ところがこ  
れをやらなければ、多分あと五年  
か十年で世界じゅうの軋轢あつぱの中  
で日本は苦しむでしょう。

今、アメリカから女の通産関係  
の担当者が来ています。そして日  
本の各省大臣と話をしています。  
ご承知のように、米作につきまし  
てはガットというところ。長  
野県の羽田さんという農水大臣だ  
た人、彼は六年のうちには要する  
に農産物の自由化をいたしますと。  
日本の百姓さんだけがいい暮らし  
をするというわけにはいかないか  
ら、これはもちろん山梨県とかあ  
るいはスイスとか、どこでもと  
にかく対等な形で農産物の問題を  
貿易自由化によって処理してい  
ますと。こういうことをちゃんと  
言っているんですけれども、しか  
し、代議士が仮に皆さんにお会い  
になったら、めったにその話をし  
ないわけです。なぜかという、  
その話をしたらお百姓さんは投票  
しないから。長野の代議士は百姓  
のことを考えろと、二十年ぐら  
いも言ってきた。まさかガットとい  
うところへおれたちの農産物を自  
由化する、アメリカあるいはオー  
ストラリアと競争させると。それ

も対等な形でなんて言うはずがな  
いと思っておりますから、代議士  
候補の方もこの問題をしゃべると  
きは用心深くなります。私は幸い  
にどなたからも一票いただかなか  
てもいいですから、本当のことを  
申し上げます。

この問題は非常に大事です。そ  
うすると、あらゆる品物について  
対等な形で自由化していく。これ  
は、幸か不幸かは別として経済大  
國の責任です。これをやらなきゃ  
いけないでしょう。そのほか経済  
大國にはいろんな面倒くさいこと  
がくっついてまいります。例えば  
品物を売るときに、日本の市場、  
マーケットというのがございます  
が、これをなるべくオープンマー  
ケットにする。そして日本の流通  
機構に外国の人も入り込んで、そ  
して公平に、西武であれあるいは  
東急であれ、そういうデパートで  
競争させてもらう。これにつきま  
しては、十五日ほど前に亡くなり  
ました前の日銀総裁の前川春雄さ  
ん、「前川レポート」というもの  
を昨年発表いたしました。そして、  
総理大臣の中曽根さんに提出した。  
総理大臣に提出するというのは大  
した重要なことではないわけが  
が、もっと重要なことは、世界に  
それを示してきた。日本のマーケ

トでは、日本人の親しい人に有利  
に売らせるといふことはしません。  
どうぞ韓国の方もいらしてください。  
い。アメリカももちろんです。ど  
なたも公平にここで商売の競争を  
していただきますということ、  
諸外国に出ていくときも対等でご  
ざいます。国の中のマーケット  
も対等にしていく、そしてマーケ  
トをオープンにしていく。

実は前川さんと一緒に、去年の  
春、ドイツのシュミットという前  
の総理大臣と一緒にある会議に出  
ました。前川さんの報告は大変立  
派です。しかし、前川さんの報告  
どおりに日本は動いていないん  
です。報告にそう書いていただけ  
んです。前川さんは十五日ぐら  
前に亡くなりました。ちょうど私  
はドイツにいました、シュミット  
が言うには、前川レポートは立派  
だ、しかし実行しないんですね。  
これはどういう仕掛けになってい  
るんですか。その問題です。それ  
をここをご卒業になる小学校の先  
生になる人はどう教えるのか、あ  
るいは教育学部ではこの問題をど  
う扱うのか。文部省は余り方針を  
指示しないだろうと思えます。文  
部省の人も肩書が好きですから。  
ですから、そのほかにいろいろ  
ありますね。流通機構に出してい

く品物は、オープンマーケットで  
すから、ここに韓国も来ればある  
いは台湾も来る、さらに香港も来  
る、しまいに大陸の中国も来る  
んです。西洋人もみんなやってく  
る。ということ、世界全体に世  
界規模のマーケットというものを  
つくらうという勢いでそれぞれの  
國が動いているのが現在の情勢  
です。ところが、私は先ほどから戦  
後のことを申し上げた。こっちは  
貧乏からはい上るためにいろん  
な制度をつくった。ですから、そ  
れに則ると通産省の役人が、ある  
いは文部省の役人が代議士さん方  
と話をするとときに、どうやってほ  
かの國をつぶして日本は栄えるか  
を考えるとことになる。したがって、  
その制度をやっていたら、大変難  
しいところになってしまふ。私は、  
それをなんとかできたら大したこ  
とになると思えます。本当に大し  
たことになる。だから、国際交流  
いたしましよというは、黒人の  
人とか白人、あるいは黄色い人、  
いろんな種類の人間がおりますが、  
そういう人に会ってただニコニコ  
して仲良くしましよというので  
はまずいんです。大事な話は金  
ですよ。この金の話で本当に対等  
にいけるんだと。

それで、皆さんも新聞で毎日の

ようにお読みになっているでしょうが、今や社会主義国もそれできましよう。あのゴルバチョフというソ連の人は、私はそこへあさって行くんですが、ゴルバチョフという書記長さんは、要するにソ連も門戸を閉ざしているのはもう終わりだと。ソ連の周辺にソ連を中心にする国がたくさんございしますが、そういう中で例えばハンガリーという国、ここではもうデパートもあり、女の人はきれいな服を着て、そして買い物をしている。ハンガリーのマーケットはもうオープンしました。日本でも売らせてくださいと今ハンガリー政府は言っております。ハンガリー共産党はつぶしますと。そして日本と同じように、あるいはアメリカとも同じように、いろんな政党がお互いに衝突したり議論しながら動いていくという次の段階に進みますと。

私は七月にハンガリーに行つて国連大学の会議を開いてもらいました。大学の名前はカール・マルクス大学、その大学に会場がありました。ハンガリーの大統領が来ました。カール・マルクス大学にはカール・マルクスの立派な写真が、絵がぶら下がっています。ところが彼が何と言ったかというと、

このカール・マルクスに従わない方向で我々は今後やることに決めました。もうこの人の時代は終わりましたと。カール・マルクス大学に行つたんですよ。こういうことはちょっと普通では信じられないんですが、事実そうです。お隣のポーランドというところへ行つても同じ。そこでマーケットをあけて、あんまり貧富の差はなるべくつくらない。ここが難しい問題ですが、例えば福祉というものに力を注いでいこうと。そして今、日本で問題になっております消費税、あるいは大型の税制もございしますが、いわゆるそういうものの上手につくり上げていく。やっぱり一部の人だけが金持ちにならないうような自由競争、それにどうやって進んでいけるか。今、海部さんが苦労しているようですが、その方向に向けて、しかし自由によっていきましようというところをございします。

そして日本は余剰の金が世界に一番あるんですから、そうすると、その余剰の金を使ってかつての日本のような貧しい国を助ける。つまりきょうの屋敷はあるかないか、あるいは今日学校に行こうと思うけど学校はあるかな、こういう国が大体一〇〇あります。人口五十

億の人類の中で飢餓線上にある人が五億人。そうすると、その人たちを食わせる、その食わせる応援を世界の国々がしておりますが、ことしから金額の上で日本が出しております援助費というのが世界でナンバーワンになりました。アメリカが二番目。ただ、日本は不馴れですから、今のところは、そのお金をどうやって使うんですかというところ、それはどこの川に橋をかけます、あるいは学校の講堂をつくります、あるいはテレビ局をつくります。しかし、本当にどうやってそれを動かしていくんですか。それはイギリス人に聞いてください、ドイツ人に聞いてください。そうすると、本当にイギリス人やドイツ人が来るわけです。そして、その会社が活動し出すと、やっぱりイギリスの援助はよかったです。日本人というやつは物を持ってくるだけで、それ以上の知恵がないらしいという。これは一つ大問題ですが、しかし、都留文科大の卒業生がある段階で出ていくと、そういう援助のしかたの問題も変るところにいき得るんではないか。私たちはその皆さん方と世代をともしておりませんが、しかし皆さんはそういう状況の中で世界にぶつかっていくということ

になるわけでございます。留学生の諸君ともそういう問題で話している。お隣の韓国はかなり豊かです。そのお隣の朝鮮民主主義人民共和国ということになりますと、そうではないです。

中国は、ついこの間は小平という人が中心で、今のゴルバチョフと同じようなことでやったんですが、うまくいかななくなつた。うまくいかななくなつて、今は昔と同じような体制に戻つて自由化どころではない。まず、共産党でもう一度締め直すんだという状況でございしますから、さしあたり、そういう公的な関係を深められないわけですが、こういうものも研究しながら、どこでどんな形で日本人と中国人と協力するか。

一番大事なのは、どういう形でも日本人はアメリカ人と協力するのか。というのは、アメリカの赤字が今一〇〇〇億ドルです。そんなことを言われたってピンとこないだろうと思ひます。私もピンときません。その中身が双子の赤字といわれているんですが、一つは財政赤字。財政赤字というのは政府が使います予算です。これから出てくる赤字がたくさんあります。もう一つは経営赤字といひまして、貿易上、売ったり買ったり、そう

いうことから出てくる赤字、これを足しますと、一〇〇〇億ドルを超えます。そこで、アメリカは今までのままでいけば、現在既に世界最大の債務国になります。つまり借金の額が一番多い国。これは日本人はなかなか信じられない。実はアメリカ人が信じられない。それで私はアメリカ人にも説明しました。永井さん、本当ですか。本当ですと。そうすると、その双子の赤字のアメリカをどうやって助けるか。アメリカという国は戦後世界ががたがたになったとき、まずヨーロッパを助けた。マーシャルという軍人さんがいたんです。そのマーシャル元帥の名前をとりました「マーシャル基金」ということをやりましてヨーロッパを浮かび上がらせた。日本にもいろいろやってくれました。そのアメリカが今危ないわけですね。そうすると、まだ日本というのはそれほどはありませんが、ヨーロッパでも一体アメリカにどう協力するか。日本語で言えば恩を受けたわけですから、恩返しです。

しかし、もうちょっとざっくりばらん話をすると、アメリカの市場がつぶれたら日本の商売はないわけですよ。一番大きい市場、どうぞ使ってくださいというから、こっ

ちでつくる品物はアメリカへ送っていたが、もう買えませんかから勘弁してくださいと。これではあんまり議論をするまでもなく、こっちはまいるわけです、こっちの経済が。そこで、一体アメリカをどういうふうに支えるか。全く新しい、その新しい問題が世界の歴史の上に浮かび上がってまいりました。どう考えても、今、世界の歴史というのは歴史上珍しい、そういうところに差しかかっているし、日本という国はその中で非常に珍しい主役です。つまり今まで自分のことだけ考えてきた、金もうけなんかも。もちろんそれも続けますよ。しかし、その使い方が、自分だけではないという段階にいかなきゃいけないわけです。

## 科学技術と人間

ただ、あと三つのことを申し上げたいからそこまでにして、その次にどういふことを言いたいかわかると、科学技術と人間ということ。この大学は文科系大学です。そして、世の中では実は科学技術の研究とその進歩が非常に目覚ましいですから、都留文科大なんという何やっているんだと。あの山の中に残って日本の古典を讀

んだり、西洋の古典を讀んだり、いよいよピント外れの学生があとこから出てくるんじゃないかと。ちゃんとこの学校のことを調べない人は多分そう言うだろうと思います。私はそうではないと思うんです。その理由を言います。つまり科学技術というものは今ものすごい勢いで変わっている。私も東京工大に勤めたことは、先ほど上田君にお話いただいたとおりですけども、しかし私も文系の人間です。では、なぜ東京工大にいたかということ、その一つの理由は、京都大学の文学部教育学部にずっと勤めておられますとピンとがぼけてくるんです。つまり世の中で科学技術が盛んなのに朝から晩まで文科のことだけ言っていると、もう京都大学は総合大学にならない。口だけ総合大学、しかし実は分裂大学。文学部は文学部のことを考える、工学部は機械のことだけ。総合大学なんていっているけれども、全然総合性がないわけです。それで、私はとても一流のエンジニアリングにはなれませんが、しかし東京工大に勤めると、まあ知識のおこぼれにあずかって、ちっとぐらい科学技術のことを知るチャンスが増えると思いました。それは結果におい

て非常によかったですと思います。そこで、これからやはり科学技術は、いわゆるハイテクと言っておりますが、今、山梨大学の学長は物理の分野からおいでの先生ですが、そういう物理学の面で大変いろいろな進歩発達が起っている。あるいは生物学、ここでも目覚ましい変化が起っている。さらに宇宙の開発ということも起っている。これが人間にとって本当に信じられないぐらいの便益を与えるということは否定できないわけです。大月と東京なんていうのは、前でしたら日帰りで講演をするというようなことはもちろんなかった。しかし、今はそんなことは当たり前のことです。それほどばかりか、私はここから帰りますと金沢へ行きます。そんなことも当たり前のことになりました。つまりコミュニケーションとトランスポートーションというのが根本的に変わっただけです。そうすると、皆さんのご親戚やお友達にイギリスで働いているとか、あるいはインドネシアで働いているという人がいるでしょう。そういう人と連絡をしながら仕事をしていくことも必要になるでしょう。しかも、科学技術によって国が富んだり大変な生産が起ったり、それ

から特にコミュニケーションについて言えば、第三次産業がどんどん発展したりというありさまでございますから、これを尊重しなきゃいけません。大体そこまでは科学者や技術者が演説するんです。でも、そこから先がない。そこから先が都留文科大学の守備範囲なんです。 どういうことかという、科学技術が全部うまくいくかと。本当にそう思うんだら広島へ行ったらっしやい、長崎へ行ってっしやい。爆弾二発を落とすだけで、落とした元凶は、アインシュタインという立派な物理学者です。ユダヤ系の人でドイツを逃れてアメリカに行きました。この人は大物理学者、歴史に残る人。アメリカの大統領に向けて、ヒットラーなんてやつは大抵のことじゃへこみませんよ。我々は原子爆弾をつくれますから、そこで原子爆弾をつくってやつつけましよう。そしてアメリカはつくってできた。できたときは、もうヒットラーはいないです。だれに使おうかと。もう一人ヒットラーくさいやつがいる、そこに落とそうということ。二発落ちました。実はアインシュタインはびっくりしたわけです。アインシュタインの頭はドイツ、

ドイツとありますから、その結果できた爆弾が自分のよくわからぬ日本というところに落ちたということは信じられないことで、そこで、その爆弾が落ちて広島だけでも十万人死んだと、長崎も後で死んだ人を含めれば十万人に到達する、大変びっくりした。自分は間違っていたと。そこで原爆を全部廃止しようという声明を、それこそ当時の世界の歴史上一番偉い、すくなくも三、四人の偉い哲学者の一人であるラッセルというイギリス人と一緒に声明を発表しました。アインシュタイン・ラッセル声明、原爆はとりやめましよう。しかし、人間の業というものは難しいんです。そんなことを言うけれども、原爆をやめてどういふふう安全秩序を図るんですか。またしても鉄砲でやりますか、タンクですか、それともよっぽどたくさん飛行機をつくりますか。そんなことを言うのだったら、やっぱり原爆を持った方がいいです。その議論が頭のいいロシア人、頭のいいアメリカ人、頭のいいイギリス人、一番頭のよさそうな議論に議論を重ねて四十年、まだ知恵がないわけです。そこで、どうするかというのがこれからの問題ですね。大変だと。



そこで、さすがのレーガン大統領、ゴルバチョフ書記長、とにかくヨーロッパに中距離核兵器というものがございりますが、それをやめましょうというので条約を結びました。これは第二次世界大戦が終わって初めての条約です、核兵器を少し減らそうと。しかし、大きな核兵器ではないわけですよ。ヨーロッパで使う中型。したがって、日本の周りにごろごろいたしておりま

は先生方がどう考えるか。機械と人間、あるいは科学と人間、この対比の問題。それだけでなくて、昨今は環境という問題を言うようになりまして。去年の春先から、風光明媚で有名なカナダという国が環境問題で苦しむようになりまして。カナダにケベックというところがあります。カナダは太平洋と大西洋に面している国ですが、そのケベックというところにとてもきれいな森があるんですね。カナダ人は気がつかなかった。その森の木が半分枯れて死んじやうと。どうしてなんだろう。まあ、その周りにおける程度工業もあることはあるんですけども、しかし、それだけで世界に有名なこの森が半分だめになったというのはわかるわけがない。そこで政府が調査団をつくって研究をしました。わかりました。お隣にアメリカ合衆国があるんです、ちょっと南の方に。そこにデトロイトという自動車工業の中心がある。そこから煙が出てくるんですね。それで、ばい煙というのは国境があつたら、そこでパスポートを出しますなんていう話はない。遠慮なくカナダにおいてになるわけです。そしてカナダの森を半分だめにする。と

解決がつかないんです。もうこれはいや応なしに国際関係ということになりまして、去年の選挙は、第一の争点は消費税ではない、カナダの場合は。この方々からやってくるスモーク、これをどうするか。環境問題に国境はない。例えば都留ですよ。それは市長さん、こんなきれいなまちはないです。都留の人が都留を汚すはずがないです。しかし、関東地方から流れてくるものがどこへいくのか。それはだんだんに考えなきゃいけない重要な問題です。そういう問題を文科大学がどうとるか。イタリーに、ペッツェーという人がいまして、一九七二年イタリーで声明を出しました。これからの人類の危機は戦争ではないですよ。厄介なことが五つあります。一つは環境。もう一つは、どんな産業をおこしていくと資源がなくなる。三番目が何かというと、食糧の生産なんです。人間がふえると食糧が大変なことになる。四番目は人間の増え方。北方の白人とか日本人というのはそう増えない。南の方ではどんどん増えていく。それは難民です。日本で昨今、難民、難民と聞いて驚いていますが、その数はせいぜい一〇〇〇とか二〇〇〇とかいいます。今、例えば

フランクフルトというドイツのまちへおいでになれば、フランクフルトの人口は多分二〇〇万人ぐらゐあるわけですが、その三〇％は難民です。いわゆる六十万人大ぐらゐ、そういうものが今、世界じゅうで動き出している。ペッツェーという人はそうなりますよと。しかし産業を起こさなきゃいけない、これが五番目だそうなんです。そうすると、環境のことも考え、資源も考え、人口問題も考える。ただ、南からの産児制限というわけにはいかない。そういうことをならみながら、どういうふうな世界の人口構成にしていくか。日本人は昔から、自分のところの人口構成は考えるけれども、世界のことなんかはとてどもとてども言っていたんですが、しかし、そのペッツェーというイタリー人は、そんなことを言っていたらだめですよということを騒いで、これは本で大来佐武郎という人が訳していますが、「リミッツ・トゥ・グロウスー成長の限界」、ダイヤモンド社から出ているから、興味のある人はお読みになったらいいと思うんですが、本当に厄介なことだと思っ

わけです。科学技術が進歩する。しかし、文化的にあるいは人間的にこれをどういうふうにするか。さめていくかという答えはまだない。イギリスのC・P・スノーという大変著名な評論家がいいますが、このスノーという人は、人類の大問題は、資本主義、社会主義ではないです。資本主義の方も社会主義の方も本当に困っちゃう。この科学技術でできた文化、もう一つは文化系の文化、この二人がなかなか、結婚どころかお見合いもしない。そしてばらばらになっていく。この答えを出してるところがあれば、そこがこれからの世界の文明の中心ですよ。それで私は、けさからここへ来ていろいろ聞きました。コミュニケーションのこと、あるいはコンピューターのことを先生方に教える。あるいはまた自然科学の領域である物理とか科学、こういうものも研究しながらいい先生が育っている。いろんな努力がここで始まっていることを知ったわけですが、これが大事ですね。そのいい形を本大学がつくり上げることができたなら、本当にすばらしい。それはもう日本だけの問題というようなことではないのです。世界の問題。ソ連へ行つて話してもいい

し、カナダへ行行って話してもいいし、ガーナへ行行って話してもいい、必ずやって来るでしょう。日本にそんな都留文科大學が、本当にあるのか。そういう考えで来るだろうと思えます。

## 民主主義と自由人間

三番目の問題は民主主義と自由人間ということです。もう世界は貴族政治の時代には戻らないです。今世紀大騒ぎになったことが二つあります。一つはソ連に革命があった。それで、ソ連も革命によって一挙に社会を変えちゃおうと。もう一つは、第一次、第二次の戦争を経てアメリカが世界の中心になった、このアメリカ式民主主義。白人であれ、黒人であれ、黄色であれ、インディアンであれ、そんなことは関係ない。みんなでつくる社会ですね。だから中曽根総理大臣があるとき窮地に立たれました。イスパニックというラテンアメリカから来た連中はあんまり頭がよくないということを言われました。日本人は頭がいいと。そうしたら、アメリカの大統領を初め偉い人たちみんな興奮したわけです。なぜ興奮したかというと、アメリカは、イスパニックであれインディアン

であれ同じ人間である。それを含めて成功してみせますよと言っているところにそんな話をされたら、これは身もふたもないわけです。だから日本の総理大臣にそう言っていただきたくない。しかしソ連も同じことです。そうしてこの二つが世界を分割して争ってまいりました。そして二つ戦争があった。第一次、第二次世界大戦。そういう戦争が終わってすべては幕がおりたかという、実を言うと、その戦争が終わってから世界に百幾つもの戦争がありました。日本がやらないだけであって、発展途上国で百幾つありました。死んだ人が約二〇〇〇万人。したがって、二十世紀の前半と後半で死んだ人の数は、十九世紀までの合計の上です。すごい数字になります。そこで、アメリカもソ連も今度合意したのは、もうソ連の民主主義、アメリカの民主主義、そこを抜けようじゃないかということ。じゃ、どうするんですか。世界の民主主義というところにいきましよう。だから、今の難民の問題であろうと、あるいはみんなが抱える問題であろうと、協力できることはしましよう。しかし、まだそれらはうまくいってないわけです。それよりもっと大事な問題は、自

由というのが民主主義についている。それをしっかりやりましよう。と両方が言い出したわけです。特にソ連の場合は共産党ね。ここに共産党の方がおいでになったら私が申し上げることは耳に痛いでしょうが、まあ、それでも申し上げるほかないんです。共産党よりもマルクスという人は偉いんですね。この人は絶対に偉いんです。そして、この人の言うことは科学的なんです。ということになりますと、マルクスの教えに従って社会主義をつくって民主主義を発展するということはいということになります。しかし、そういう一方で、マルスクとちょっと違うことを考えている人も、案外賢い人もかもしれない。賢くなくても、その人の自由を考える力を尊重しないしていると人間の生活が妙になると、ほかならぬゴルバチョフが言い出したわけです。するとアメリカの人も、もちろんそうです、私は前からそれをやってきたと。そこで、自由というものが非常に大事になります。

この間の参議院選挙で、日本では今まで不自由だと言われていた女の人がたくさん当選しました。今度総選挙をやるとどうなるか。ともかくこれまでの民主主義だけではなくて自分の意見を言う、そしてその意見について責任を持つということが始まってきたわけです。これはなかなか大変なことです。そうすると、私なんか男性のはしくれでございますから、私も家内にやられるわけです。ところが考えてみると、家内なり、そのお仲間どもは私とその仲間は何百年もやられているわけですから、つまり今やっとな世紀に男女の問題、それから地位の上下と人間の自由の問題、これを本格的に考えるときがきました。

それじゃ、例えば上田君、学長は不要か。もうそろそろひっくりかえるか。そうではないだろう。そういう新しい社会の中で、学長というのは何をするのか。先ほどご紹介ありましたように、私も国際文化会館というところの理事長をいたしております。私に責任があると思っております。思っています、そこで働いている男もたくさんいる。それで、民主主義であると同時に自由な発言あるいは自由な行動、そして人権の尊重、これはなかなか大事なことです。じゃ、アメリカは全部うまくいっているかというと、最近、かの有名なアメリカの学者が日本へ来て講演をしました。我々の方もソ連と違う方向でへとへとになつてい

んかに言わせるといって、大問題だ。したがって、相互に人間が愛情を持つことが大切。そこで私は今の私の話の初めに申し上げましたように、都留という小さなまち、森に守られて、そこで友情、愛情に満ちた学校ができた。これが規模の文明に対する挑戦になると申し上げたわけです。

ところが都留より小さいところ、家庭ですね。この家庭というのが穏やかでなくなってきたつある。ソ連の方は規則が多すぎてどうしていいかわからない。今度はアメリカの方は規則が少なすぎてどうしていいかわからない。日本がそのどっちにいくんですかという話は、まだちゃんと始まっているとは私は思えません。しかし、そういうことをいるんな大学で考えていくべきだと思っし、そういうことは本学においても非常に大事になるかと思っし。

## それぞれの文化

続いて第四番目は、これからの社会には何といってもそれぞれの人が背景にしている文化ということがありますね。その文化が、日本の文化とフィリピンの文化とアメリカの文化、ソ連の文化、みん

な違います。この違う文化を持っている人は対話をしなきゃいけないわけです。例えて言えば、文化の中に言語がありますね。我々は日本語を使っている。イギリスやアメリカの人は英語を使っている。そうすると、英語にふさわしいような文化を彼らは維持してきているし、今後とも維持するでしょう。日本人の方は日本語文化に生きるでしょう。もうどんな英語を勉強して日本語をやめちゃうかという人もいるでしょうが、実は明治の初めからこれについてたくさん議論があった。省かせていただきますが、やっぱり日本がしっかり伸びていくには日本語を勉強した方がいいという結論に到達して今日に至っておりますから、今日の会もちゃんと日本語でやっているわけです。(笑声)しかし、世界には植民地になって、「もう自分の国の言葉は放棄いたしました。」というのがある。この辺で一番そういうのに近いのはフィピンでしょう。もちろんタガログ語という現地の言葉がございすけれども、しかし、公式の会議なんかは英語でやります。

明治の初めの日本の偉いリーダーはとても悩んだ。日本語を廃止しようか。本当に考えた文部大臣

が一人いるんです。森有礼という人。幽霊で出てくる幽霊じゃないですよ。礼儀があるという人。この人は、もう日本語をやめましようとする時期考えました。しかし周辺の人が、そんなことを森さん言ったら、日本の文化が全部なくなっちゃうからだめと。具体的に言っ、英語で私というのはIというんですね。男も女もI、だからIという言葉の一つ覚えれば、それが単数の一人称、これを教えておくわけですよ。日本語で私というときは幾つあるか、字引を一度お引きになるとおもしろいです。日本語は一人称で自分ということ

を言うときは五十言い方があわいけです。それを全部覚えてる人はいないでしょうけれども、しかし、普通の日本人だったら大体十か二十は覚えてる。男でしたら、おれ、わし、私、我……、そういうふうにとくさんある。女の方はまだ私とか、わてとか、うちとか、いろんな言い方があって、特に愛情を示そうとするときはどうであるか、非常に複雑なんです。また、日本人の中でも自分のことを朕という人がいます。これは特別な人しか言わない。だから朕というのはなかなかいいと、それじゃ、山梨の都留文科大学では学長が朕と

いうことになったら、(笑声)上田学長は警察に連れていかれる、ちょっと頭おかしいんじゃないかということになるだろうと思っす。それが一人称単数の例で、私は申し上げたわけですが、つまり自分というものを考えるときでも、考え方が違うわけですね。それが言語に結びついている。そういう日本人の文化のあり方を、やっぱり堂々と世界に向けて説明しなくちゃいけない。何だか変な言葉でしゃべっているから、こっちがぐあいが悪い、何でもしつかりした人間になるにはというので西洋の教科書を読まれたわけですね。これは明治の初めからやっていますから、そういう意識の日本人もいるわけです。明治の初めから西洋化、戦後はアメリカ化。そういう人が出てくると、あの人は教養があると。ところが日本語を上手にしゃべる人が出てくると、あの人は教養があるとは言わないんです。ということではまずいと思っす。

ですから、文化が対話をしないといけない。この都留で変な生活をしているわけじゃない。あなた方も我々の都留、そして都留文科大学、都留の市役所、都留の店、都留の住民、そこで何を考え、そ

して、どういう世界をつくらうとしているかということ堂々とおっしゃる。ここにだれがいるかという、共産党の中国人じゃないですよ、いわゆる華僑と呼ばれる中国人、この人たちがいる。そして、その人たちは漢字を使っている。そこで、今、世界の段階でたくさん本が出てきている。決して誇張でないほどたくさん出ています。アメリカあるいはイギリス、ノルウェー、そういうところの本が出てきて、新しく評価をはじめている。世界で科学技術や経済が発展するのは、プロテスタントというキリスト教のあるところに決まっていた、今までは。それはマックス・ウェーバーという偉い人がちゃんと本に書いています。それが漢字とその文化のために変わってきている。韓国の人は儒教、香港もそう、日本人もそう、きょうお集まりの皆さん方だって、世界のどこへ出たって、これだけ礼儀正しくて、そして知的に進んだ集団というのはないと思っすよ。

それで皆さん方は何を共通にしているかという、毎日漢字で頭の体操をしています。それから人にあいさつするときの仕方というのは非常に儒教的だと思っす。みずから辞を低くする。それじゃ、

人の話を聞いて何にも自我がないかというところ、お勉強して自分のところはそれなりにする。そういうことはその値打ちを書いた本が、今アメリカだのヨーロッパにどんどん出てきている。でも日本人の方は、余りに儒教のことを宣伝して、中庸な臣民ができ、戦争のとき潔く死ぬばっかりだったというような記憶もあるようですから、もう儒教やめておきましょうというようなことですので、国の中で儒教という大事な教えについての議論をちゃんとやるということが少なかつた。ところが、外国の人はそんな考えはありませんから、一生懸命勉強する。それがここ二、三年激しくなりました。私は来年から先は大変だと思えます。

実は一週間ほど前に北京で、私は行きませんでしたけれども、儒教がこれからどうなるかという会議をやった、この中心になったのは、アメリカのコロンビア大学のソバールユという儒教の先生、真正正銘の西洋人ですよ。そこにソ連の人も出てくる。香港、台湾もみんな来ている。日本の先生は一人も来てなかったそうです。それで私に、永井さん、どうですかと。まあいろいろ考えたことがあって、ちょっと待ってくださいというふ

うに申し上げたわけです。というのは、人によって儒教を利用して儒教には、女は男の言い分をよく聞いた方がいいとか、おのれの言うことを聞いたならもう絶対という、そういう面もありますから、そうすると慎重に考えなきゃいけないですね。儒教の意味を本当に知れば、偉い人がおかしいことを言ったときはいさめなきゃいけない。それから人間は物を言うときには謙遜になってお勉強しなきゃいけない、そういうことを教えているわけです。そうすると、どうすることが必要なのか。今リクルート問題とか何とか問題とかいって果てしなく倫理のことを議論しています。私はやっぱり倫理の問題を解決するときには、倫理の原則は何か、これがやっぱりちゃんとなきゃぐあいが悪いと思えます。その場限りで騒ぐばかり。そういうことだとすると、その問題はまだまだいてない。都留文科大学はどう考えていくか。

どうもいろいろ注文ばかりつけましたけれども、そういうことをやっぱり若い学生諸君に対しては、先生方がお考えになって、そして新しい道を開かれたら非常におもしろいと思えます。

長談義をいたしました。要する

に以上申し上げた四つの点、どれを見ても世界史がものすごく変わっているということとはご同意いただけると思います。その中で敗戦のときの大転換に等しい、あるいはそれを超えるような大転換をやるわけですから大変だと思えます。しかし、初めに申し上げたように、上田君と一緒に京都のまちを歩いて、私たちも天下を考えていました。私たちが洞察はできませんでしたが、すから若い諸君も、東京に行けば大転換なんてことはないです。むしろ地方で時間がある中に、友達と一緒に歩くというようなところから大きな変化が起こってくるでしょう。大きな思想も起こるでしょう。そういうふうにはこの大学を利用されたらいいと思えます。それで二つ申し上げたわけです。

私は実は東京へ帰って、あした石川県の金沢へ行きます。スイスが日本語学校研修センターをつくるので金沢へ行くんです。スイスがつくるんですよ。ちょっと変でしょう。どうしてかというところ、スイスという国は自分の国の言葉はないんです。自分の国はドイツ語とイタリア語とフランス語。だから、言葉というのには国境に限定される必要はないという、ちょっと世界のほかの人と変わった考え。

そこで日本語というものももっと盛んにして、世界の人が勉強したらということ、それには石川県の金沢がちょうどいいと。私はその出身ですから、もちろん私の出身だからいいんだろうと思ったから、そうではない。つまり東京は忙しすぎる。京都に行くことと日本の昔は偉かったとお説教ばかり聞くと。そうすると、金沢ぐらいが一番いいのかなということ、あしたの一時から日本語研修センター開所式というのがありまして、そして、言語と国境と平和についてみんなで議論をすることになっていきます。日本は今や地方の時代です。

そして私はあさってモスクワに参ります。何のために行くかというところ、モスクワが呼んでくれたわけです。何のために呼んだか。これもここに関係があるから申し上げます。これから東洋学を盛んにしていかないとソ連も困ると、日本人とつき合う上で。それで、とにかく日本人がどういうやつかわかるためには東洋学をやった、そして近松を読んでみたい、西鶴を読んでみたい。最近、近松を翻訳したら五万部売れたそうです。そこで、そういう日本という国、日本だけでなく東洋学ですから、

韓国のことを知りたい、あるいは中国のことも知りたい、その相談をやりましょうということ。しかし、あらゆるそういう国際的な活動に何より大事なものは拠点です。そして拠点で立派に卵が育つ。そこまでやっておけば、その卵は、だれかが余計なことを言わなくてもさらに見事に飛ぶと。私はこの学校が立派な卵を育てることを確信しております。どうかそういうことで、一層のご発展ありますことを心からお祈りして、長談義を終わりにしてやめたいと思えます。

